中西　進著

万葉の世界

中公新書
341

中公新書 341

中 西 進著

万葉の世界

中央公論社刊

中西　進（なかにし・すすむ）

1929（昭和4）年，東京に生まれる．
1953（昭和28）年，東京大学文学部卒業．
1959（昭和34）年，東京大学大学院卒業．
現在，成城大学文芸学部教授．文学博士．
専攻，国文学．

著書『万葉集の比較文学的研究』（桜楓社）
『万葉史の研究』（桜楓社）
『山上憶良』（河出書房）
『柿本人麻呂』（筑摩書房）
『万葉の詩と詩人』（弥生書房）
『万葉の心』（毎日新聞社）
『滅びゆく万葉大和路』（角川書店）
『万葉の大和』（毎日新聞社）
『古今六帖の万葉歌』（武蔵野書院）

万葉の世界
中公新書 *341*
© 1973年
検印廃止

昭和48年11月15日印刷
昭和48年11月25日発行

著　者　中西　進
発行者　高梨　茂

本文印刷　三晃印刷
表紙印刷　トーブロ
製　　本　小泉製本

発行所　中央公論社
東京都中央区京橋 2-1
振替東京34　電話(561)5921代

はじめに

万葉集と現代

万葉集という書物は、ふしぎな書物である。数多い古典の中で、これはおそらくもっともよく知られているものであろうし、これほど親近感をもたれている古典もまた、少ないであろう。日本人なら、誰でも一首や二首の万葉歌を暗誦することができるにちがいない。

それにともなって万葉集の研究も、古来おびただしく行なわれて来た。註釈書にしても研究書にしても、万葉集はほかの古典をぬきんでて多い。そして研究のみならず、これを一般の人々に解説する書物も、数えあげれば相当な冊数になるだろう。ことにこの数年は古代史ブームとでも呼べるような傾向があって、世の万葉集への関心も高い。

それは、私のように、より多くの時間を万葉集とかかわって生活している者にとって大変にうれしく感ぜられる。しかし、そんな時、私はよろこばしさと同時に、ある種の落着きの悪い感情

を味わうのも事実である。というのは、そこに語られる万葉集のほとんどがいかにも決まりきったことを、飽きもせずにくり返しているように思えてならないのである。

これは、ことばをかえると、日本人の誰彼がもっている万葉集への知識なり享受の仕方に一定の型があるということではないか。たとえば万葉集の歌人として知っている人々の名前、その人人の作った歌々などは、世上にほぼ共通して行なわれ、それほど深浅の差がない。額田王（ぬかたのおおきみ）といった女性は、才気あふれた美女で、天智・天武両帝から愛された人だ、というふうに誰彼が額田王のことをよく知っている、といったぐあいである。また、万葉集は率直に自己の感情を表現した、けがれなき古代の人々の歌集で、われわれ日本人の魂のふるさとである、と数多くの人が誰しも思っている、といったふうに。

こうした状態は、万葉集が、あっぱれ国民的古典であるという誇らしい事実を物語ると同時に、しかしそれはかなり一面的なものだという失望も、ともなって来るだろう。しかして、それがなにに起因するのかと考えるとき、実は根は大変に深いのであろうと考える。世上への万葉集の提供者をしてそうさせ、世の享受者をしてかくさせてしまう何かが万葉集には、ある。享受者が次の提供者になるのだから、両者の宿命は実は同一のものだろう。万葉集は、万人をよび寄せ、さそい込みながら、それでいてある一定の領域以上には享受者をはいり込ませない、拒否の態度をもっている。私が、万葉集はふしぎな書物だといったのはその点のことである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor

この万葉集のあり方は、一体どういうことなのか。本来万葉集という書物は、大変むつかしい古典だと私は思う。とにかく千年以上前の、漢字ばかりで書かれた四千五百首もの歌を、しかもかなり雑然と集めてある歌集なのだ。古来のすぐれた研究は、この堅城を少しずつ切り崩して正体を明らかにしては来たが、まだまだ不明な要素が多い。あるいは明らかにしたと思われている事柄が、実は正しくないことがある。万葉集の奥部は、まだまだ鬱然と蔽われた暗部なのである。享受者はそこにつき当たると、Uターンして引き返して来なければならない。それでも、明るく照らされた入口の開拓地の風景に十分満足して帰って来て言うのである。——額田王という美貌の才女は二人の天皇から愛された悲劇のヒロインである、と。

そして、そうなるのは、やはり万人が求めるに足る魅力を万葉集が持っているからなのだが、それは都合の悪いことに、すぐ流行をうむ結果となる。魅力のないものは、はやりはしない。ところが、流行なるものは三つの性格をもっている。通俗性と感傷性と画一性とである。かくして万葉集も、皆が口をそろえて、情調的に同じことをくり返すようになるのだろう。万葉集は現代人の失った真率のひびきをもつ、心のふるさとである、と。その結果、万葉集はみんなが知っていてみんなが知らない古典となった。

万葉集の位置

それでは、万葉集をどのように理解すればよいのか。私とて、右に述べたような鬱然たる暗部がわかっているわけではない。そしてまた、心のふるさと的な

万葉集の要素が、まったく誤りだと考えるわけではない。しかし、もう少し万葉集のことを考えてみる必要があるのではないかという気持は強い。

万葉集以後、今日までの歴史が万葉集をどのように要請し、万葉集はどのようにそれに応えたかという事実は、そうした場合に存外強力な意見をわれわれに示して来はしないだろうか。そういうことだけを漠然と頭の中に思い浮かべただけでも、大変示唆深いものが感じられるようである。

長い古典詩史の中で、万葉集の伝統は地下水脈のようにつらなっていて絶えない。しかし、それはついに地上に大河をなして流れる水流とはなっていないように思われる。それでいて地下の水脈は常に地上をうるおしつつ、一度として涸渇したことはなかった。

このあり方を換言すれば、万葉集はその時々に反措定として常に強力に存在して来た、といえるだろう。一つのものが限界を迎えた時、その飛躍のために万葉集はエネルギーとして求められ、それを提供して来た。平安朝の和歌にしても、「古今集」を範とする新しい美学は、それだけで以後の詩史における王座を保ちつづけることはできなかった。つねにこれを革新しようとする運動が、万葉ふうの復活、導入によって試みられ、その上に「新古今集」という新しい美の結晶がもたらされた。しかし「新古今集」が万葉集より「古今集」に近いことはいうまでもなく、万葉集は新しい美を樹立するための主役を演じたわけではない。その点にも万葉集の地下性があるし、

事実今日から見ても万葉ふうな中世の歌集は当時「もののふ集」という侮蔑的な評語を与えられているのである。これは近世においても同様で、下河辺長流あたりからはじまる万葉への回顧が国学をうみ、賀茂真淵一派の県門（けんもん）の万葉ふうな和歌をうんで来るが、それはやはり、京都の古今派によって主座を占められ、当の国学の完成者ともいってよい本居宣長は、けっして万葉ふうの和歌は作っていない。近代に到って、大歌所の旧派和歌が正岡子規の万葉尊重によって否定され、そこから近代の和歌史のはじまることは、よく知られたとおりである。

万葉以後というのは、とりも直さず「古今集」以後ということだが、そこにおいて右のようなあり方をするのは、いわば日本的な美学の範として存在した「古今集」が、つねに万葉集との緊張関係を強いられて来た、ということである。強いられながら「古今集」は主座を保ちつづけ、強いながら万葉集はつねに野にあった。ここに、まことに興味ある日本の美学と万葉集の位置との、ともどもの姿が照らし出されているではないか。

もとより万葉集と「古今集」は、まったく対立し合う異質な歌集ではない。「古今集」の抒情の基盤は万葉集にあり、もし「古今集」が爾後の日本文学の抒情性の中心にあるとしたら、さらにその前に位置する万葉集は抒情の源泉ではあるが、彼に一斑を与えつつ、万葉集はそれ以外のものを本質としているようである。かりに名づけて日本文学の美学を「あはれ」と呼ぶ習慣にならえば、この主情的耽溺的な感動に対応する「をかし」といった感動が万葉集の基本にある、と

いってもよい。彼の湿潤性に対する、此の乾燥性といってもよい。中世とか近世とかとよばれる時代は、比較的自由に、これら後者の感動が表現された時代であったし、平安時代とて歌謡や説話の中にそれは息づいていたのだから、万葉集はそれらと呼応し合う立場にある。万葉集を要請した趨勢は、これらが「あはれ」の主流に対して抵抗を試みようとした時であった。

この万葉集の特質には、二つの理由が考えられる。その一つは万葉集の日常性、生活的性格である。王朝美学が、その範疇に容認されるものしか表現しなかったのに対して、万葉集の表現者は、生活者であった。それが後の民衆の歌謡や説話という無名者の文学の中に尾を引く原因であろうし、昇華しつづける文学に対する反措定の役を引きうける基ともなったのであろう。その意味で万葉集は恒常的な適応性を歴史に対してもちつづけることとなる。

そしてもう一つの理由として考えられることは、王朝美学の完成度である。伝説的な逸話だが、賀茂真淵は本居宣長に「古事記」の研究をすすめ、宣長は生涯をかけて「古事記伝」を完成することとなる。この二人が出会ったという、例の「松阪の一夜」という逸話は、王朝以前に日本の心性があるという真淵の認識を語っている。真淵の眼前には、もう一つ儒学というのりがあって、その向う側に真の日本を見ようとする意図があったわけだが、そうした王朝美学や近世儒学、さらにはもう一つ中世的仏教といった各時代の堅牢なのりの向う側に万葉集や「古事記」があったことは、どのように万葉集などに唐ぶりの影響を指摘しても、なお厳然として残る事実である。

それはけっして「日本的」と称する国粋的なものというのではない。価値上ののりをもたない人間の自由が、万葉集の表現を豊かにしているということなのだ。そこに、万葉集が地下水脈として永続したと先にいった、その源があろうと思うのである。

万葉集の享受

あるいはこのようないい方は、矛盾をもつといわれるかもしれない。つまり、歴史的に普遍の存在であるということと、古代的な特性をもつということは時として矛盾することもあろう。しかし、そのようなものこそ、まさに歴史的な存在なのではないかと私は思う。万葉の人々が深く古代に根ざして生きたという歴史性において、彼らは普遍を獲得したのであろう。われわれはつねに歴史的な存在でしかないのだから。

彼らの表現者としてのこの生き方は、特徴的に個別を拒否した態度に現われているように思われる。往々にして天才は歴史ばなれをしようとする。そのような体質を万葉集はもっていないのである。万葉集の基層を構成するものは無名歌である。あるいは著名な柿本人麻呂や大伴家持の歌にしても、それらは生活次元の連帯の中にある。

実は、そうした表現のあり方がわれわれ日本人の常態だったのではないかと考える。今日において、和歌・俳句という、これほどの国民詩をもっている民族が他に存在しないということは、まさにそれを証明すると思うのである。三好達治が国民詩人と称せられる原因の一つは、その和歌的発想にあるのではないか。われわれは和歌的なものに、心やすらかに結合する心性を、潜在

させてはいないか。

わたしは、これから万葉の世界を述べるに当って、右にのべたような万葉集のあり方が示唆するものを、基本に置きたい。日本文学の本質に照らして万葉集を考え、逆に万葉集によって日本人の文学を考えるという態度で万葉集を眺めようとするのだが、そのことによって、いまだ知られざる著名古典は、多少ともその本体を明らかにしてくれるのではないか。

万葉集の森は、もう少し角度をかえた照明によって、多少は明るさを増すかもしれない。その照明の光源に、日本的美学に緊張を強いたものとしての万葉集と、古代的心性としての万葉集とを置いて考えようと思う。それは、和歌という表現の形式と、万葉びとの人間としてのあり方と、そして歴史としての古代とを見きわめることにもなろう。そうした意図の中から次に五つの項目を樹ててみた。これを辿りつつ、万葉集の〝型〟を変更すべき旅にわたしは出発しなければならぬ。多難な旅である。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor

目　次

はじめに……1
万葉集と現代　万葉集の位置　万葉集の享受
第一章　古代と和歌……3
諷歌と倒語　久米部のことば　ことばの呪力
大伴の祖　大伴氏と万葉集　万葉集の必然性
万葉集とヲコ　和歌のヲコ性　和歌と漢文
儀礼の歌　生活行事の歌　哀歓の歌　共同幻想の美　幻視と創造　脱落の美　詩の自立性
語部の歌　詩と歴史
第二章　歌人の様式……47
詞の媼　詞の媼の歌　歌の享受　宮廷歌人たち　公の歌　歌物語の創造　「女」の歌

命婦の女性たち　坂上郎女　家と歌人　笠金村　虫麻呂と福麻呂　家々のサロン　歌人の女　家の女　巡遊の歌人　時の人の歌　歌物語の創作　遊女　詞の伝統　恋する女性　万葉集の流れ　宮廷歌の行方　非和歌の世界

第三章　集団と和歌……108

無名歌と類歌　高市黒人の周辺　憶良の周辺　勅撰集の世界　勅撰集と私撰集　歌謡の世界　宴席の歌　連続的な展開　古歌と和歌　小説的な構成　歌集と類聚歌林　場の文学

第四章　主体の構造……139

口頭のことば　対者との相関　物象と心情　旋頭歌の形　複合の主体　対応の主体　仏足石歌　重層の主体　人間連帯の詩　「ひとり」　大伴家持の歌　現実の形

第五章　和歌と抒情……170
女歌と男性歌人　万葉以後　「古今集」の判断
叙事と抒情　長歌と短歌　思想と和歌　方言
など　王朝の雅語　俊頼のことば　物語の和
歌性　もののあわれ　原質としての抒情性
あとがき　201
索引　203

万葉の世界

第一章　古代と和歌

「日本書紀」の神武天皇元年の記事に、次のような一節がある。神武天皇即位の記事につづく、書紀としてもじゅうぶん大事な記事として扱っているところである。

初めて、天皇、天基を草創めたまふ日に、大伴氏の遠つ祖、道臣命、大来目部を帥ゐて、密の策を奉承けて、能く諷歌、倒語を以て、妖気を掃ひ蕩せり。倒語の用ゐらるるは、始めてここに起れり。

諷歌と倒語

大伴氏の祖先である道臣命は妖気を掃いしりぞけたという。しかして、それは「諷歌」「倒語」をもってしたのだという。「諷」とは、「なぞらえる」という意味だから、他の事にかこつけて歌をうたうのが「諷歌」、今日諷刺などというときの「諷」とも同じである。「倒語」というのも「反対のことば」という意味だから、事柄をそのまま述べるのではなく、内容を倒錯したことばのことであろう。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton